

主体性と超越の相互的關係 ——実存の哲学から人間的存在の哲学へ——

押見 まり

20世紀の哲学者ジャン・ヴァール（Jean Wahl, 1888-1974）は、ソルボンヌ大学で教育に携わる傍ら、フランス哲学会の会長や『形而上学・道徳雑誌（*Revue de métaphysique et de morale*）』の編集主幹を歴任し、当時のフランス思想界で活躍した。彼の影響はレヴィナスやジャンケレヴィッチ、ドゥルーズといった、20世紀の思想界を彩る多くの思想家たちに及んでいる。しかし、ヴァールの思想の内実については、未だ十分に解明されていない。だが、20世紀後半のフランスに端を発する諸思想の展開を引き受け、現代の諸問題を考察するうえで、それらの思想に影響を与えたヴァール思想の解明と検証は不可欠であろう。

そこで本発表では、ヴァール思想の解明の一助となることを目指し、ヴァールがいかにして、彼以前の、あるいは同時代の思想を引き受け、それらのうちにいかなる課題を見出したのか、また、その課題を踏まえ、いかなる企図の下で自らの思想を構築したか、という観点から考察を試みる。これらの問いに答えるための手がかりとして、本発表では、「ヴァールの名発表」とも称された論考「主体性と超越（« Subjectivité et transcendance », 1937）」（『人間の実存と超越（*Existence humaine et transcendance*, 1944）』所収）を取りあげる。

本発表では最初に、キルケゴール、ハイデガー、ヤスパースの思想のうちにヴァールが見出した主体性と超越との関係について、その構造を素描する。ヴァールはこの論考において、キルケゴール思想に見られる主体性と超越との相互的關係が、ハイデガーとヤスパースの思想にも継承されていることを指摘し、ハイデガーとヤスパースをキルケゴールの思想的後継者と位置付けている。ヴァールがこの指摘によって言わんとするのは、「実存の哲学」がハイデガーとヤスパースの思想に至るまで、神学的・宗教的なもの名残をとどめていることだ。

では、ヴァールが指摘する「実存の哲学における神学的なものの残存」という点は、いかにして問題たりうるのか。それは、実存自体が内含する有限と無限の逆説に対し、実存の哲学が十分な注意を払わず、また、形而上的実在からの分離としての「人間の貧窮」という観念を実存の哲学が継承することによる。かくてヴァールは、実存の逆説を激化させる対立項として形而上的な超越概念を指定する思想を批判し、「実存の哲学」から神学的・宗教的要素を排することを試みる。

かかる問題意識の下で、ヴァールは形而下的領域のうちに実在を探究する哲学を構想する。そして、神学的・宗教的要素に代わり、「自然」が、人間の基盤に存する形而下的な超越と指定されることになる。

以上のように、ヴァールは、形而下的領域にも実在があるのではないかと提起し、神や善のみならず、人間の基礎をなす此方の他に目を向けようとする。このようにして人間的存在を問うことこそ、ヴァールの思想的企図であると結論できよう。